

不妊治療により多子出産が増加

米国では、不妊治療が行われるようになり多子出産が増えた。しかし、不妊治療が多子出産率の上昇にどのような動向で、どの程度関わっているのかは明確にはされていない。そこで、本研究では不妊治療と多子出産の関係について検討した。

不妊治療がまだ行われていなかった 1962 年から 1966 年の自然妊娠による多子出産の割合を調べた。1971 年から 2011 年の多子出産のデータを国の多子出産率に用い、1997 年から 2011 年の体外受精のデータより、不妊治療による年間の多子出産の割合を評価するのに用いた。母親の年齢については補正した。多子出産の動向については、多子出産を減少させるために体外受精のガイドラインが確立した 1998 年以降のデータを対象とした。その結果、双子の 36%と、三つ子以上の 77%が不妊治療によるものであった。双子の出生率は 1971 年から 2009 年の間で 1.9 倍となった。三つ子以上の出生率は 1971 年から 1998 年の間で 6.7 倍となり、1998 年から 2011 年の間では 29%減少した。この減少は、体外受精で 3 つ以上の胚の子宮内移植が 70%減少したことと ($P < 0.001$)、体外受精による三つ子以上の出生率が 33%低下したこと ($P < 0.001$) が関係していた。したがって、過去 40 年間に米国で不妊治療が多く行われるようになったことが、多子出産率の上昇に関係していることが示された。三つ子以上の出生率は過去 10 年間で減少し、これは体外受精において 3 つ以上の胚を子宮内へ移植することが少なくなったためであった。

出典 : New England Journal of Medicine. 2013; 369: 2218-2225